

イザヤ書19章23－25節 「三国の祝福」

1A 大国の主にある一致 23

2A 第三の者 24

3A 三国それぞれへの祝福 24

1B エジプト「わたしの民」

2B アッシリヤ「わたしの手で造った」

3B イスラエル「わたしの嗣業」

本文

私たちの聖書通読の学びは、イザヤ書 17 章まで来ました。本日は 18 章から 20 章を一節ずつ読んでいきます。ユダの周囲の国々に対する預言で、エチオピアとエジプトに対する神の宣告です。その中で、驚くべき神の祝福の預言があります。今朝はそこに注目します。19 章 23-25 節を読みます。「23 その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。24 その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。25 万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」

イザヤ書の学びをしている人たちは、この箇所を読んで「あれれ？」と思うことでしょう。この三国は敵対している者同士だからです。北にいるアッシリヤがユダや周囲の国々に侵略をしようとしています。そして南にいるエジプトは、その反アッシリヤの動きを後押しすべくそれらの国々を動かそうとしています。その間に挟まれているのがイスラエルです。しかし終わりの日に、これらすべての国が主に仕えることによって、三つの国が平和を保ち、共に神の祝福を受けている幻です。当時の人々が読んだら、夢物語にしか過ぎなかったことでしょう。

今朝は、私たちは平和について、主キリストにある平和について考えたいと思います。実はこの箇所は、毎年年初めに例年行われている、東アジア青年キリスト者大会の主題聖句になっている部分です。東アジア、すなわち日本と中国と韓国は歴史的な深い結びつきを持っていながら、政治的には対立している現状があります。しかし、その三国がキリスト者の間に神の国の平和を保ち、神の栄光を表すという主旨であります。国際政治の中、マスコミや時事問題の中では対立感情が深くなっている中で、私たちの大会では、平和の御国が実現しています。中国と韓国の若いキリスト者が、我が国の安倍首相のために執り成しの祈りを捧げます。同じく私たち日本のキリスト者も、中国の習近平主席、韓国の朴槿恵大統領、そして北朝鮮の金正恩総書記のためにも、執り成しの祈りを捧げます。ここイザヤ書にあるような、当時の国際情勢でも全く考えもつかなかったことを幻で見たのと同じように、神の御国の幻は、私たちを世の人が考えつきもしない方法を生み

出してくれます。

私たちの間、その周りでは平和は保たれているでしょうか。パウロは、「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。(ローマ 12:18)」と教えました。しかし現実には、そうでないことがあります。ある事をされて、酷い目にあったのであれば、その人とは会いたくないと思います。あるいは何か対立している人たちがいて、「あちらを立てれば、こちらが立たず」という状態になることもあります。あるいは、自分自身の中に平和がないかもしれません。「こちらのことも大切だが、あちらのことも大事で、どちらを優先させればよいか分からない。どちらも大切なのに、どちらを選べばよいのだろうか」ということで内なる葛藤を経ていることもあるでしょう。あるいは、「生活の保障、経済的な必要が足りない。どうやりくりすればよいだろうか？」という心の騒ぎがあるかもしれません。そういったことを考えながら、キリストにある平和を求めていきたいと思います。

1A 大国の主にある一致 23

もう一度 23 節を見てください。「その日、エジプトからアッシリヤへの大路ができ、アッシリヤ人はエジプトに、エジプト人はアッシリヤに行き、エジプト人はアッシリヤ人とともに主に仕える。」

エジプトの国があり、アッシリヤの国があり、しかもその間に大路、すなわち国際幹線道路ができたというのは、驚きの地図です。しかも、共に主に仕えています。二つの古代文明はこの二つの国から成り立っています。一つは、エジプト文明です。ピラミッドなどのことを考えれば、良くお分かりになると思います。もう一つは、メソポタミア文明です。ユーフラテス川流域に発達した文明です。この二つの大きな文明に挟まれたところを、神はアブラハムに約束の地としてお与えになりました。そして、二つの文明が平和を保ち、その文明をつなぐ、シルクロードのような国や大陸をまたぐ道があって、それで互いに交流があれば、共存共栄という理想が生まれます。事実、イスラエルは二つの文明に挟まれながら、そこを行き来する貿易によって栄えた時もありました。しかし往々にして歴史は、そうではないことを物語っていました。大国にはエゴがあり、大国と大国の衝突によって、イスラエルは安全保障上の脅威に晒されていたのです。

エジプトは、神から遠く離れた国です。イスラエル人を虐げる国でした。王パロは、イスラエルの民を奴隷として使役しました。しかし、そこは魅力のある国でもありました。学問に優れ、ナイル川のおかげで肥沃な土地を有していました。今で言うならアメリカのような大国でしょうか、私が旅行に行くと言うと「羨ましい」という声を聞きます。けれども、私たちがしばしば行くもう一つの国については、「羨ましい」という言葉は聞きませんね。何かアメリカには、ハリウッド映画にあるような大らかさ、その国の強さを思うのでしょうか。当時のエジプトも同じだったのです。イスラエル人にとって、エジプトは常に「そこに行けば、豊かだし、敵から守られるかもしれない。」という幻想があったのです。しかし、エジプトはエジプト神話にある、多神教の国でした。魔術も発達しており、イスラエル人としては行って住んではいけない国だったのです。

アブラハムがせっかくカナンの地に入ったのに、飢饉があったのでエジプトに下っていった時のことを思い出してください。その時に、エジプト人ハガルを女奴隷として得たので、それからアブラハムはお家騒動の中で心を痛めなければいけなくなりました。彼女から生まれたイシュマエルが、今のアラブ人の子孫になり、ユダヤ人とアラブ人の対立は今に至るまで続いています。「頼って守られたい」という誘惑を作る国、けれども後は痛い目にあうという肉を象徴する国であります。

アッシリヤは、強い力を示す国です。創世記 10 章に、神に反逆する権力者ニムロデが出てきます。彼は、バベルの町を立てました。それからさらに進出して、ニネベを建てました。力をもって国を栄えさせる気風がそこにはありました。そしてアッシリヤ帝国が紀元前八世紀に台頭すると、周囲の国々を征服して、残虐な方法で人々を殺して恐怖を植え付けました。「恐怖」の象徴だったのです。したがって、ユダにとって、アッシリヤが南進してきて、自分たちの南にエジプトがあるという状況は、「恐れと戦うために、目に見える保証、安心を求める」という強く誘惑でありました。アッシリヤの力を恐れるあまりに、自分たちがエジプトによりかかって生きていきたいという誘惑です。しかも、他の神を知らない周囲の国、ペリシテやモアブ、またシリヤなどは、同盟を結ぼう、エジプトの助けを借りようとユダにけしかけてきます。

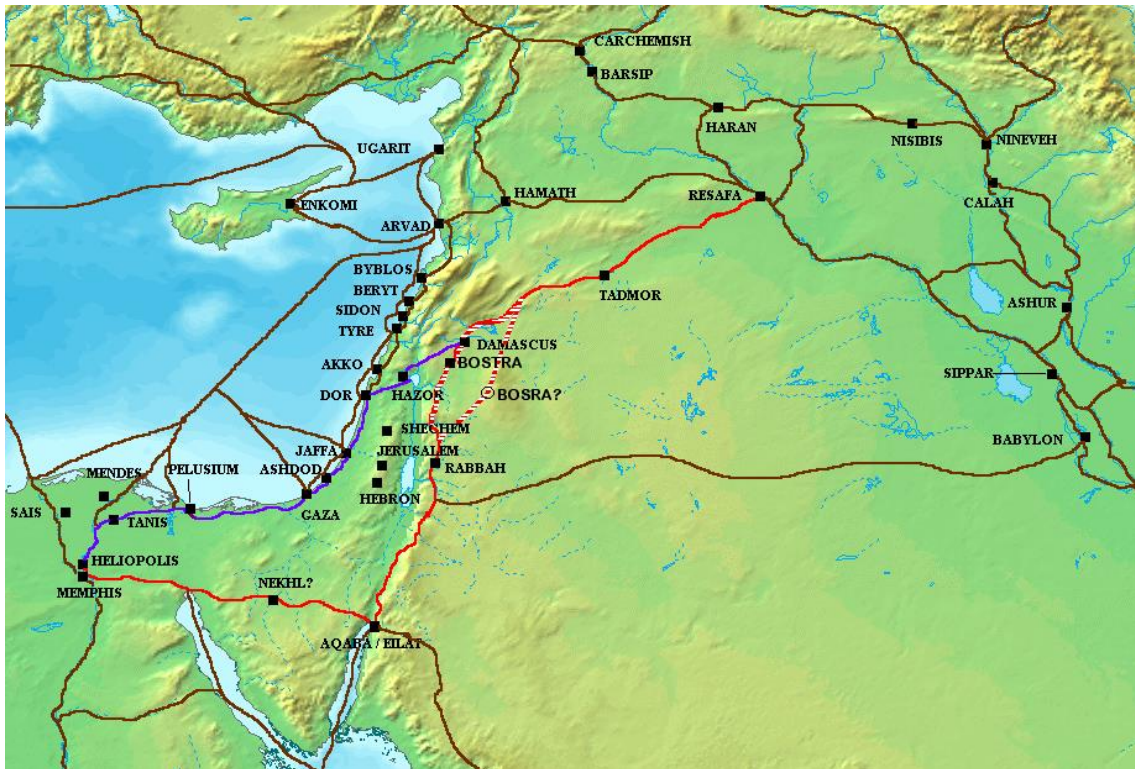
しかし、恐れや不安を人間に頼ることによって解消しようというのは、必ず後で痛みを被ります。人に頼ることによって、ますます自分をがんじがらめにしていきます。人ですから、裏切られます。けれども、元に戻ることはできません。それで、自分がどうすればよいか分からなくなります。そして私たちの生きている社会は、じわじわとこれまで安定していたものが取り除かれています。若者は、職は見つかるのか、経済はどうなるのか、将来は今の日本のようではない、という漠然とした不安があります。こうした苛酷な現実があるので、多くの人が内向きになっています。つまり、現実を視ないようにしているのです。そして、自分の守られる所を確保しようとして、どんどん自分の世界が狭くなるのです。ソーシャル・メディアがそれを可能にする技術です。電車の中で七割の人が、下を向いてスマホに向かっている姿はそれを象徴しています。これはまさに、アッシリヤが迫っているのにエジプトにより頼んでいる姿そのものです。しかし、その安心しようと思う領域はとても脆いものです。

主は将来、エジプトを究極に弱くされます。そして、終わりの日にはエジプトが反キリストによって虐げられます。しかし、彼らはイスラエルの神を求めます。そして彼らを救うために、主が戻って来られます。それがイザヤ書 19 章 16 節から 11 節までに書いてあることです。私たちの生活にも、同じことがあるでしょう。主が私たちの安全を、人間や目に見えるものに頼っているのを、その愛のゆえに打ちます。そして、自分がただ主のみに頼らなければいけないことを知るようになれます。打たれることは辛いですが、しかしその打たれることによって神は癒しを与えられるのです。

そして、主イエス・キリストが地上に戻られて、神の国を造られますが、その時にエジプトからアッシリヤに向かって、シルクロードのような長い大路を設けてくださるのです。これは境目がなくな

ることを意味します。隔ての壁がなくなることを意味しています。互いに敵意がなければ、相手を恐れて壁を設ける必要がないからです。そうすると、物流が行き来します。人的交流も増えます。それで、共存共栄できるのです。私たちの間もそうではないでしょうか？互いに敵意がなくなればなくなるほど、恐れや不安が取り除かれればそれだけ、私たちの心に壁がなくなります。そうすれば、それぞれに与えられた神の賜物を分かち合い、それで豊かにされます。

実は、古代にエジプトとダマスコを結ぶ国際幹線道路がありました。エジプトから、「海沿いの道」、「ヴィア・マリス」とラテン語で言いますが、今、その古代からの幹線道路は、イスラエルの南西にあるガザ地区でエジプトとの国境が封鎖されています。さらに、ガリラヤのカペナウムから北上してダマスコに向かっているのですが、もちろんイスラエルとシリアは敵対関係にあり、その国境は軍事境界線になっていて行き来ができません。



https://en.wikipedia.org/wiki/Via_Maris#/media/File:Ancient_Levant_routes.png

私が 2010 年にイスラエルを旅行した時に、パレスチナ自治区に独り旅をしたことがあります。パレスチナ自治区の首都的機能を果たしているラマラ、そして聖書ではシェケムであるナブルスに行きました。ラマラに驚きました、とても賑わいのある町だったのです。それもそのはず、検問所はとても緩やかでした。テロ事件が当時、ほとんど発生していなかったからです。このように、境が取れると平和の波が広がります。そしてそこには繁栄も入っていきます。前回の東アジア青年キリスト者大会では、ある牧師さんが、北朝鮮が開かれる夢を語っておられました。そこが開かれれば、一本の道路ができる。中国と韓国を結ぶ道路ができる。そして韓国の釜山と日本の福岡に長い橋、幹線道路ができれば日本からアジア大陸への共栄圏ができることを話しておられました。平和さえあれば、このような大経済圏ができてもおかしくないのです。このことが、終わりの日にはイスラ

エルを中心に世界に広がるのです。

2A 第三の者 24

そして 24 節を見てください、「その日、イスラエルはエジプトとアッシリヤと並んで、第三のものとなり、大地の真中で祝福を受ける。」イスラエルがエジプトとアッシリヤの間にある国となります。そこは、辺り一面、主に仕える広範囲な領域となりますが、その中間地点のところにはイスラエルがあります。そこがエジプト寄りでもなく、アッシリヤ寄りでもなく、むしろキリストを王とする第三の国として立っているのです。

これは、当時のユダに対して強烈な語りかけとなっていたことでしょう。なぜなら、ユダはエジプトに頼るか、それともアッシリヤに屈するかのどちらかの選択だと思っていたからです。しかし、預言者イザヤは、ユダに対しても、また周囲の国々に対しても、「シオンにこそ救いがある」と伝えていました。シオンにこそ、まことの王がおられて、この方により頼む者が救われると教えていました。だから、エジプトでもなくアッシリヤでもなく、第三の道があることを教えていたのです。

主は、私たちに絶えず第三の道になることを命じておられます。「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。(エペソ 2:14-15)」とあります。この二つとは、ユダヤ人と異邦人のことです。ユダヤ人は異邦人の支配を受けている中で、自分たちを守るために律法の掟によって困いました。食物規定、安息日などの戒めによって、異邦人と自分を区別しました。そして食事をするのはもつての他です。しかし、キリストが彼らの平和となってくださり、それぞれがキリストに出会うことによって、両者の間に隔ての壁が壊れたのです。それで、兄弟として同じ食事の席で同じ物を食べることができました。これぞ、第三の道です。異邦人側に付くのではなく、ユダヤ人側に付くのではなく、キリストを主として仰いでいるならば、この方を頭としているならば、両者が一つにつながるのです。

しかし、これはしんどい働きです。なぜなら、キリストを主とするならば、ユダヤ人からは「あなたは異邦人に迎合している」と非難されます。けれども、キリストを主とすると異邦人からは、「あなたはユダヤ的だ。」と非難されるのです。どちらからも非難されます。けれども、それは横の問題ではありません、縦の問題なのです。ユダヤ人であっても、異邦人であっても、その対立は自分自身が神につながっていない、キリストによって神のところに行っていない、ということが問題なのです。ユダヤ人が異邦人に敵対しているのではなく、自分自身が神と和解していない、神との平和を持っていない、ということのほうが大きな問題なのです。ですから、「私はあなたに対して罪を犯しました。反逆していました。今、悔い改め、あなたの用意された罪の赦し、キリストの十字架の言葉を受け入れます。」と言うときに、自分にある敵意、神に敵意していたことが取り除かれ、神との平和をキリストにあつて持つことができます。そして、それぞれが神と仲直りできた者たちが、一つに引き寄せられて、そこには既に互いに敵意がなくなっています。これが、神の造られた平和なのです。

ユダヤ人と異邦人ではなく、結婚している夫婦でも同じことが言えるでしょう。そこで起こっている問題は、夫がこれこれをした、妻があれをしてくれない、こうした横の対立のように見えます。けれども、実はそれぞれがキリストにあって神のところに行き、自分の心にある頑なさを砕いていただきます。キリストこそが自分の主として、主に対する自分のわがまま、反抗をやめて、服従します。すると、いつの間にかキリストにあって二人は近づいていくのです。夫の言い分が正しいのか、妻の言い分が正しいのか、こちらを立てればあちらが立たない、という問題ではなく、キリストを立てるのです。キリストを立てれば、両者とも立つのです。キリストを第一とすれば、両者とも建て上げられるのです。このことが、将来、目に見える形で世界的な規模で、エジプト、アッシリヤ、イスラエルの間で実現します。イスラエルの神を主とするエジプト、アッシリヤがいて、イスラエル自身がその真ん中にいて、キリストを王とする第三の国となるのです。

3A 三国それぞれへの祝福 24

それぞれの国が、主の恵みに預かっています。24節を見てください、「万軍の主は祝福して言われる。「わたしの民エジプト、わたしの手でつくったアッシリヤ、わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」これは何と言ったらよいでしょうか、最も祝福を受けてはいけない人々が、祝福を受けてしまった、と言ったらよいでしょうか。エジプトとアッシリヤ、神の呪いと裁きを受けるに値しますが、祝福されています。そして神に反抗してきたイスラエル、こんなに神を捨てていたのであれば自分たちも捨てられて当然だったのに、神に祝福されています。まさに、「罪も増し加わるところには、恵みも満ちあふれました。(ローマ 6:20)」とあるとおりです。

1B エジプト「わたしの民」

エジプトに対して、「わたしの民エジプト」というのは強烈な言葉です。なぜなら、エジプトは神に何と言われて来たでしょうか、「わたしの民を行かせて、彼らをわたしに仕えさせよ。(出エジプト 9:1 等)」ですね。エジプト人にとって、「わたしの民」とはイスラエル人のことであり、自分たちは子の民と区別されて神の災いを受けたのでした。イスラエル人がエジプトを出ていく時に、エジプト中で泣き叫びが起こりましたが、初子、長男が死なないでいる家はなかったからです。けれども、イスラエルの民の男の子は誰一人死にませんでした。ですから、「わたしの民」という言葉は彼らにとっては、自分たちが神に退けられて、裁かれた時の言葉だったのです。

しかし今、主がエジプト人たちを「わたしの民」として受け入れてくださっています。これまで退けられ、遠く離れていた人が、神の国の一員になって祝福を受けています。なんと幸いなことでしょうか！これまで自分の愚かさ、反抗、快楽、迷い、それによって憎まれ、また自分も他の人を憎み、だれからも相手にされなかった人が、神の恵みの御霊によって義と認められ、神の国を相続するようにさせていただいたのです(テトス 2:3-7)。

2B アッシリヤ「わたしの手で造った」

アッシリヤに対しては、「わたしの手でつくったアッシリヤ」と言われました。これも強烈な言葉で

す。アッシリヤは、エルサレムにおいて神からとてつもない裁きを受けました。それが、「私は自分の手の力でやった。私の知恵でやった。私は賢いからだ。(10:13)」とする、高慢があったからです。アッシリヤが数々の国々を征服した時、それは背後に主ご自身がおられた、この天地を造られた神がすべてのことに関わっておられるのだ、ということをお認めませんでした。そんなことができるのは、私たちが全能者のようであるから、と思っていたのです。それで主は彼らに言われました。「10:15-16 斧は、それを使って切る人に向かって高ぶることができようか。のこぎりは、それをひく人に向かっておごることができようか。それは棒が、それを振り上げる人を動かし、杖が、木でない人を持ち上げるようなものではないか。それゆえ、万軍の主、主は、その最もがんじょうな者たちのうちにやつれを送り、その栄光のもとで、火が燃えるように、それを燃やしてしまう。」自分は神に造られた者なのに、それを認めないことによって滅ぼされたのです。

私は日本の人々に伝道する時に、「私は自分を信じているから」という言葉を何度も聞きました。それはアッシリヤの心です。それは、自分の生活で起こることは自分により頼んで行っていくのだ、自分がすべてのことを決めていくのだから、という思いの表れです。いいえ、自分は心臓の鼓動一つも、自分の息一つも自分で決められていないのです。「当たり前ではないか、心臓が動いているのは。」というのは、とても傲慢な態度です。今もペースメーカーを付けている人がいます、人工心臓を身に付けている人がいます。当たり前では決してないのです。ですから、神を認めなければいけないのに、それを行なわなければアッシリヤと同じように滅ぼされてしまいます。

しかし、そのように滅びに向かっている人も、今、「わたしの手でつくったアッシリヤ」と呼ばれています。なんと慰めに満ちた言葉でしょうか？自分のすべての人生は、神の御手の中で形造られたものです。何一つ、神の憐れみから離れているものはありません。その命は神が保っておられて、それで自分にとって悪いことのように見えても、実は神からの賜物でそれを益としてくださるご計画を、神を見出した人々には用意されているのです。

3B イスラエル「わたしの嗣業」

そして最後に、イスラエルに対しては「わたしのものである民イスラエル」と言われています。これはもっと正確に訳すと、「わたしの嗣業の民イスラエル」となっています。口語訳と新共同訳がそのように訳していますが、イスラエルが神に与えられた土地を相続するだけでなく、神ご自身がイスラエルをご自分が受け継ぐものと呼んでおられます。それは、言い換えればご自分にとってイスラエルが宝の民なのだ、とても貴い財産だということです。新約聖書では、「聖徒の受け継ぐものがどのように栄光に富んだものか(エペソ 1:18)」という言葉があります。これは、もっと正確に訳すと、「聖徒たちにある神の受け継ぐものがどれだけ栄光に富んだものか」となります。神が我々、聖徒たちの内にご自分の宝、受け継ぐべきことを見いだしておられるのです。

しかし、イスラエルは忘れました。ユダの国がアッシリヤから救われたものの、後にバビロンに包囲されるようになっていきます。そして、エルサレムにいる指導者たちは、神は私たちを見捨てた

のだろうと感じます。神を疑ったのです。そして、「神はもはや我々のことを見ていない。」として、それで偶像礼拝にはまっています。「主は私たちを見ておられない。主はこの国を見捨てられた。(エゼキエル 8:12)」と指導者たちは言っていました。これは大きな問題です。主の真実、その愛を疑っているのです。いろいろなことがあっても、そこには主がおられます。良い意図をもって主がそのことを起こしておられます。それなのに、「なぜ神はこんなことを私に起こるようにされたのか。神は私を愛しておられないのだ。」と疑うのです。それで神から離れるのです。このようなことを、イスラエルは行いました。

しかし、主は彼らの恵みの霊を注がれます。彼らの罪を洗い清めてくださいます。そして再びご自身の宝としてイスラエルを受け入れられるのです。皆さんはもしかしたら、神の愛を疑ってしまっているかもしれません。そして口では神を敬っているかもしれないが、心は次第に神から離れてしまい、形式的になってしまっているかもしれません。自分の周りの状況が苛酷で、神は自分に關心を寄せられていないのではないかと疑っているかもしれません。いいえ、決してそんなことはありません。神はご自分の民として選ばれた者を、決して見捨てられないのです。だから、信じる必要があります。信頼を寄せる時に、たとえその状況についての理解が与えられなくても、主がすべてのことを働かせて益としておられることを知ることができます。どんなことも、どんなものも、キリストにある神の愛から自分を引き離すものは何一つないのです。

まず、神の恵みの中に戻りましょう。そうすれば、これまで心を騒がせていたことがだんだん、整理されます。そこに平和がやってきます。これまで、「こっちをやっていたのに、あっちがうまくいかない。」という焦りや葛藤がありました。あるいは、「このことをしようとしていたのに、なかなかできない。いや、やるべきことをやっていない。」という葛藤があったかもしれません。けれども、神の恵みに戻る時、それらの葛藤もいつのまにか解かれていきます。もつれた糸は神が解きほぐしてくださいます。そして、自分の周りにも平和が訪れます、神の平和の御国が広がります。